

□書 評

by F. Holle

Spezielle Magen Chirurgie

順天堂大学教授 村上 忠 重

Theodor Billroth が胃癌患者の胃切除に成功したのは 1881 年、今から 87 年前のことであるが、現在では胃切除は本邦の津々浦々で毎日行なわれるものとも popular な手術となってきた。従って胃の手術に関する解説書も数多く出版されているし、今後も出版される傾向にある。この Holle 編の胃の手術書はそれらの中の白眉といえると思う。内容はきわめて詳細でために約 1000 頁に及ぶ大書であるが、それは現代の世界の一流学者と目される専門家によって分担執筆されているためでもある。その中には私たちになじみの深い著者として Dragsteat, Harkins & Nyhus, Hennings, Re Mine, Wargeusteen, Welch らがあり、またわれわれに親しみ易い点としては本邦の久留(抗癌体の代謝)中山ら(全副後の吻合及び胃瘻造設術)佐藤ら(食道癌切除後の胃のつり上げ術式)大島などが Kommertter として登場する。

本書は第 1 編の解剖・生理・診断・麻酔、第 2 編の手術手技の編に分れている

が、第 2 編が本書の 8 割を占める。

第 1 編の診断の項では大島(日医大→München 大学留学、現在は Berlin 大学)により、日本内視鏡学会の早期胃癌の肉眼的分類が紹介されており、この分類が国際的視野で論じられていることが分る。

第 2 編の手術についての部は図を豊富に挿入してあるため、視覚によって各種の術式を理解するのに非常に便利である。胃手術の術式については創始者の名が明記され、現在私どもが日常行なっている胃の手術が、どのような変遷をして来たか、先人の創意工夫の努力のあとがよく偲ばれる。またこれらの図では手術手技の実際が特に濃淡のある墨絵で示され、またその図の大きさも適当なので手術の前にこれらの挿図を短時間目で見ただけで疑問が十分に理解される。また手術手技の内容は、1)胃瘻及び胃腸吻合術等の非切除術式、2)先天性異常及び外傷 3)胃及び十二指腸潰瘍の手術、4)胃癌の手術、5)術後障害の 5 項目に分けられ、とりわけ良性疾患の胃切除と悪性疾患のそ

れとを根本的に区別しているのは共感できるところである。

また術後障害については、早期の術後障害としての後出血や縫合不全の発生原因及び処置、更に後期の障害としては、術後消化性潰瘍、Damping Syndrom, 吻合部狭窄等について、再手術の方法が詳しく図解されている。また胃及び十二指腸潰瘍の胃切除後の特異な障害として断端癌の発生がとり上げられ、切除後 23 年—50 年間の患者を追跡調査した成績につき述べ、かなりの頻度で癌死亡例の見られることが明らかにされている。すなわち胃切除後の経過としてはこの程度まで長期に互る管理、観察が重要であることを教えている。

現在、胃疾患に対する世間の関心も強く、診断学の進歩と相俟って、外科で取り扱う胃疾患が急激に多くなった結果、安易に胃切除が行なわれる傾向がないわけでもない。しかし胃はやはり重要な臓器であって、一寸した難点があればすぐに切除してよい臓器ではないことを本書は懇切丁寧に教えている。これらの意味を含めて本書は、胃手術にたずさわるものの座右の書として、推奨されるべきもので、随時要に応じてひもとけば、その 1 つ 1 つが研究、診療の豊かな糧となるものと思われる。

987s. 576 Abb. ¥31,080. 1968.

Springer-Verlag, Berlin

医学書院洋書部扱い